

幕末明治の写真師列伝 第二十六回 下岡蓮杖 その二十五

開催した年代は不明だが、明治20年頃(c1887)の事として、11月3日と4日の両日に、蓮杖(董古)は息子の東太郎(二代目下岡蓮杖)と共に上野公園博物館前の旧天絵学舎跡(明治14~15年頃に廃校となった洋画家・高橋由一の私塾跡)において、弘化年間から横浜開港前後に至る「実況図絵会」を、新門辰五郎の世話で入場料を取って展覧している。この時の「実況図絵会」準備中の様子と思われる蓮杖の弟子を撮影した一枚の写真が残されている。この展示は後に浅草公園五区の花屋敷でも展示されたらしく、当時の様子を、初代五姓田芳柳の弟子・平木政次が、『明治初期洋画壇回顧』(日本エッチング研究所出版部、昭和11年)の「下岡蓮杖翁」の項で、「写真術創業者の一人である下岡蓮杖翁は、横浜から浅草奥山の花屋敷に移り、一小亭で油絵を陳列して観覧料をとられたことがあります。その時の会場は、掘立小屋の休み茶屋を其儘利用して、亭の内部へ小形の油絵類(スケッチ板大)で御歴代の天皇の尊像又は古名将の肖像等を描いたものを陳列しました。その肖像は集古十種から選んだもので、中に一枚米国の提督ペルリ氏の半身像がありました。一通り画を見終ると、主婦が手づから入場者へ、珈琲を進められたものです。これが当時としては珍らしく他に類がないので、一つの呼物になりました。肖像画は総て蓮杖翁の筆になったものですが、亀井至一君が描いたのもあつたといふことを、亀井君から直接聞いたことがあります。静かなまことに奥床かしい展覧会でした。」と回想している。(註：亀井至一は明治初期の洋画家、石版画家で、西洋画を横山松三郎から学んだ弟子で、『横山先生履歴』を明治17年10月18日に書き残している)岸田吟香も平木政次も蓮杖の油絵茶屋で、蓮杖の後妻・登和から珈琲をもてなされて、珈琲を飲んで感動した。写真師の蓮杖は自分の撮影した写真などから、歴代の天皇の尊像、名将の肖像画や、写真絵を製作していたのである。

明治25年(1892)2月1日、蓮杖の友人でもあった画家の五姓田芳柳が享年66歳で亡くなっている。この年、蓮杖は浅草の店で羽二重の帯に写真絵を描いて売りに出していたが、これは余り売れなかったそうである。また当時、蓮杖は銭湯も営業していたというのがこれはよく判っていない。

このように蓮杖は明治9年(1876)頃から写真撮影などの作業は弟子たちや、息子の東太郎に任せて、終日、水墨画、泥絵、油絵を描いて過ごし、そして写真館の背景画などを製作する傍ら、蒸気機関車の雛形模型、大きな風船(アドバルーン)にオルゴールを付けて音を出す仕組み、菊花雨庇といった様々な見世物を企画したり、玉突き屋、半弓屋、大弓屋、油絵茶屋の営業をしていたのである。しかしながら、蓮杖がこの当時描いていた油絵のほとんど全ては関東大震災や第二次世界大戦の空襲で焼失してしまった。蓮杖はその余暇には、浄瑠璃も創作して夜にはそれを朗読して家族に聞かせていたりしていた。蓮杖の創作した浄瑠璃は四篇といわれているが、現在、残っている原本は、神奈川県立図書館蔵の『横濱開港奇談』(合綴表紙共三十七丁一冊：横濱開港奇談浄瑠璃「お桶子別れの段」(二十九丁)「七福神宝入船」(六丁)写本、岸田吟香の奥書あり、下岡蓮杖の印あり、發巳(1893)七月)だけである。また蓮杖は敬虔な

キリスト教徒であったため、毎年12月25日のクリスマス日にはサンタクロース姿となって蔵前浅草教会に現れて、集まっていた子供たちに菓子などのプレゼントを配っていたという逸話も残されている。

明治27年(1894)8月に日清戦争が始まって、翌明治28年(1895)4月に日本の勝利でこの戦争が終わる頃、蓮杖が考案して売り出したものに「軍旗の写真ばさみ」というものがある。これは連隊旗デザインした日の丸の額縁の中央を楕円形にくり抜いて、そこから挟み込んだ写真が見えるようにした写真立てで、その後ろには針金を曲げた支えがあって、机の上や仏壇にも置けるような物であった。この写真立ての裏側には、「軍旗之写真ハサミ 曩ニ日清戦争中軍人ノ武勇ハ勿論官民ノ協力ニテ海陸全勝ノ国威ヲ外国ニ輝カセシハ偏ニ大和魂ノ存スル処此名譽アル肖像ト此榮譽ヲ共ニセシ国民ノ男女老若カ祝意ノ記念ニ用ヒ後日ニ若シ不幸ニモ事アル時ニハ彼ノ寒暑血骨ノ各猛ヲ回顧シ官民協力一層奮励シ亦強国ノ譽ヲ挙シ事ヲ企望ス 明治廿八年 東京市浅草公園五区四十九番地 考案製造者 下岡蓮杖」と印刷されている。

明治30年(1897)、蓮杖は自宅で日本画、墨絵などを人に教えて、自身は一筆画のダルマなどの画を多く描くようになっていた。また、胡粉絵も制作していたという。

明治32年(1899)、蓮杖は喜寿を迎え、娘婿の六世尾形乾山の家へ行き、香合仕立ての稲丸面や翁の面型を焼物で製作し、それを松の実をあしらった小箱に入れて袱紗で包み、下田に居る親族や親しい友人たちに記念品として贈っている。この箱の蓋の裏側には赤い漆で、「いたづらに送る日毎のおもちゃ箱 あけてやうやう七十七歳」と蓮杖の名を添えて銘してある。この時に長い人生で何が一番印象的な出来事であったかと人に尋ねられた蓮杖は、「それは弘化三年、私が二十四歳、浦賀平根山砲台付として勤めた時で、私は人よりも良い眼力を持っていたが、その時遠目金に写った、丁度十里程沖即ち房州洲ノ崎の方面に見付けた黒い点二つ、これがだんだんと、こちら目がけて走って来たのが黒船二つである。時を移さず私は、奉行所へ報じたところ、日本の国はまるでかなえの中に湧きたぎる湯の様に湧きかえった。私は幕命を奉じて黒船に乗り込んだ。その時は全くのところ決死であったが、とにもかくにも使命を無事に果たすことが出来た。それから数えて丁度五十四年にある。風俗習慣に従っていることが何の不思議もおかしさもないが、その時私は二本の大小をたばさみ頭上にはチョンマゲを蓄えて居ったのを先方の人達は、さも不可思議そうに、しげしげと見て居った。明治になってから廢刀令も断髪も布令された時、私は先ず第一にチョンマゲを惜しげもなく切り落してしまったのである。そんな、チョンマゲが今は恋しいのだ。チョンマゲそのものではなく、寧ろチョンマゲにかかる過去がたまらなく懐しい。」と答えたという。これについては蓮杖が自ら「チョンマゲばなし」と題して石版にした一枚の紙片が残っている。これは絵巻物などを見せながら読めばすぐに「チョンマゲばなし」が判るようにしたもので、親族知人などを喜寿の祝いに招待した時の招待状でもあった。

(森重和雄)